

中国のほんの話(86)

利口者と馬鹿と奴隷 ～魯迅・散文詩集『野草』～

蔭山達弥



「利口者と馬鹿と奴隷」（聪明人和傻子和奴才）は魯迅が1925年に創作した散文詩の一篇であり、散文詩集『野草』（1927年初版）に収められた。

奴隷はいつも相手をさがして愚痴をこぼす。…ある日、かれは利口者に出会った。「先生！」かれは悲しそうにいった。涙がひとすじにつながって、目の縁から流れ落ちた。「あなたはご存知です。わたしの暮らしはまったく人間の生活ではありません。食べものは一日一度あるかなしで、その一度にしても、高粱の皮ばかりです。…」「それはまったくお気の毒だ。」利口者は痛ましげにいった。…

しかし、何日も経たないうちに、かれはまた不平が起こり、れいによって相手をさがして愚痴をこぼした。「先生！」かれは涙を流していった。「あなたはご存知です。わたしの住まいはまったく豚小屋よりひどいんです。…「あほんだら！」その男が大声でどなったので、かれはびっくりした。その男は馬鹿であった。…

馬鹿は奴隷といっしょにかれの小屋まで行くと、さっそくその土壁をこわしにかかった。「先生！なんてことをするんです？」かれは仰天していった。「おれは窓をあけてやってるんだ。」「そりゃいけません！主人に叱られます！」「かまわん！」かれはこわしつづけた。…（片山智行訳、『魯迅「野草」全訳』、平凡社東洋文庫541所収）

「利口者と馬鹿と奴隷」は三種類の人間が登場し、それぞれが現実社会の人間の典型を示している。利口者は奴隷が愚痴をこぼすと、「それはまったくお気の毒だ。」と少なくとも表面上は親身になって同情する。利口者に同情され、慰めてもらった奴隷は気分がよくなるのである。世の中の人間の大半はこの利口者に属する。しかし利口者は口先だけで慰めるだけで、奴隷のために何かしてやるわけではない。奴隷が馬鹿を追っ払って、主人に褒められた時、利口者は自分までうれしいといった様子で、「そうだと」と奴隷を賞賛するのだ。利口者は偽善者にすぎず、支配者側に手を貸しているのだ。

世の中では、真実を述べると角が立ち、適当に「ははは…」とごまかしていると、平穩に毎日を過ごしていくことができる。魯迅は執筆当時、中国社会にしっかりと根を下ろして、人びとの間に深く浸透していた病根、すなわち利口者のような日和見の处世哲学の克服をくりかえし指摘した。

利口者と正反対の立場にるのが馬鹿である。奴隷が自分の家に窓がないと愚痴をこぼすと馬鹿はただちに奴隷の家に行き、家の土壁をこわしにかかる。馬鹿は好き嫌いがはっきりしていて、悪人や悪事を敵のように憎む。馬鹿は不屈の闘争精神を持った、反抗者の姿である。実際に行動する馬鹿がいらない限り、世の中は変わらない。魯迅は馬鹿を積極的に支持している。当時、批判を覚悟の上で、民族のために度々発言していた魯迅自身も馬鹿の一人なのだから。

奴隷は苦難に耐え、抑圧され、搾取されても、少しも自覚がない労働者の姿である。奴隷は主人からきつく搾取され、豚や犬同様の悲惨な生活を送っている。しかし、奴隷は全身に奴隷根性が染みついており、反抗精神もない。苦しみを受け、感覚を失っても、愚かに搾取者、圧迫者に忠実であろうとする。

過日、実施された参議院選挙では、投票年齢が18歳に引き下げられたにもかかわらず、投票率は戦後二番目の低さであり、特に若者の投票率の低さが目立っている。10月から実施予定の消費税率引き上げに反対だし、先行きの見えない将来に不安を抱えているにもかかわらず、現状を消極的に容認してしまった私たち一人一人は、利口者或いは奴隷のいずれかであり、少なくとも馬鹿ではないことだけは確かである。

かげやま たつや（非常勤講師・中国文学）